

重要文化財 本堂障壁画

本堂障壁画76面（附指定12面）は、本堂の内部四室にわたって描かれています。

作者について、寺伝では上間の西湖図を狩野元信（かのう もとのぶ）他の三室を狩野永徳（かのう えいとく）が手がけたとされていますが、筆法や作風などから見て、17世紀前半の狩野派の作と考えられます。

桃山時代から江戸初期の堺の繁栄を伝えるほぼ唯一の資料として、昭和56年に重要文化財（美術）

下一之間（鶴之間）

式台（しきだい）から入ってすぐのこの部屋は、法要の際に僧侶が衣装を調えるためなどに用いられていました。

おもいおもいに羽を休める23羽の鶴の姿が描かれています。



鶴図



下一之間	紙本金地著色	鶴図	13面
下二之間	紙本金地著色	百日紅遊猿図	14面
	紙本金地著色	黄蜀葵図	2面
室中	紙本金地著色	松梅図	5面
	紙本金地著色	檜図	6面
	紙本金地著色	藤図	8面
	紙本金地著色	黄蜀葵図	2面
上間	紙本墨画	西湖図	24面

[附指定]
紙本金地著色 白梅図 4面
著色杉戸絵 8面
(鶴図2・朝顔図2
・吉野山図2・竹虎図2)

昭和56年6月9日 重要文化財指定

下二之間（百日紅猿猴之間）

親子の群猿が百日紅の樹上で群れ遊ぶ様子を描いたこの部屋は、当初、「長四畳（ながよじょう）」とよばれる縦長の間取りでした。



百日紅遊猿図



松梅図

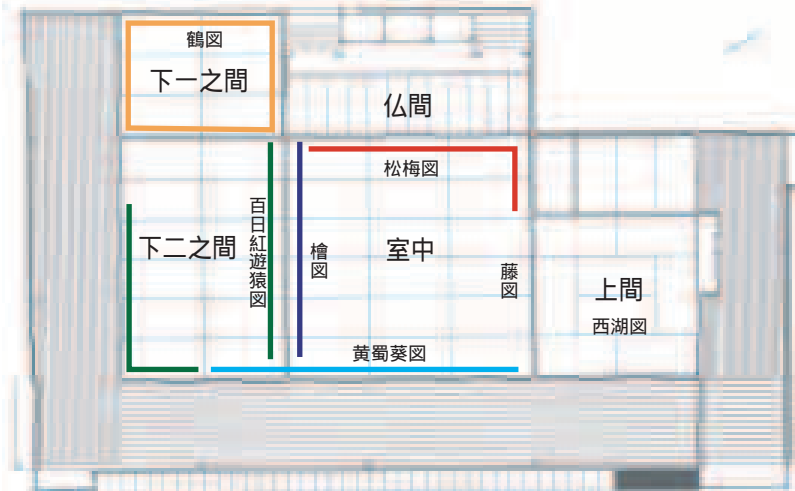


檜図



藤図

本堂現状平面図



修理のなかで、おもな柱はアスナロで・長押・鴨居・敷居はヒノキなどの木材が使われていることがわかりました。

室中

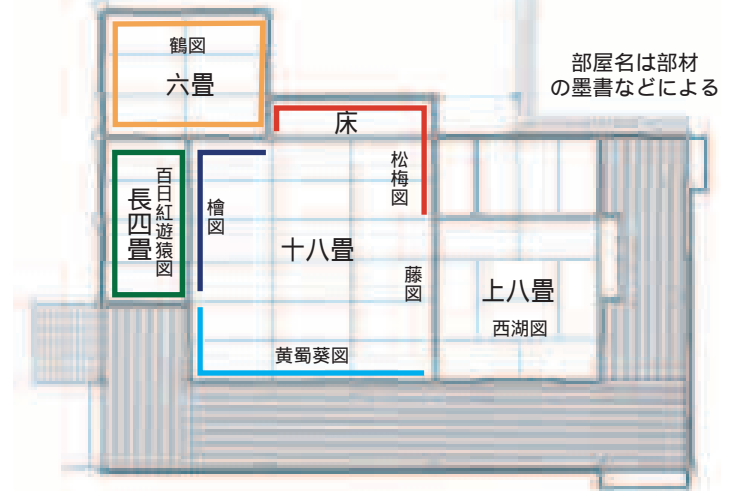
十八畳敷のこの部屋では、寺に関わる仏事が行われていました。向かって左には左右に大きく枝を伸ばす檜（ひの）が、右には幹をくねらせて棚にからみつく華麗な藤が描かれています。

正面の松梅図は、当初は大床の壁に貼り付けられていました。

正面左側の四面は、明治25年（1892）に盗まれたため、現在は金地襖のみがはめこまれています。

縁まわりの障子の腰には黄蜀葵（おうしよき・とろろあおいの一種）が可憐に描かれています。

本堂復原平面図 邸宅から寺院へ



部屋名は部材の墨書などによる

本堂は、貿易商人として巨万の富を築き、晩年は豊臣秀吉に疎まれて没落したとされる堺商人納屋助左衛門（なやすけざえもん）の居宅を移したものと伝えられてきましたが、定かではありません。

しかし、今回の修理で、この建物ははじめからお寺として建てられたのではなく、もとは住宅建築だったものを大きく間取りを変更してお寺の方丈に改造していることがわかりました。

障壁画もまた、紙継ぎの跡などから、前身となる建物に用いられていたものを、現状の間取りに合わせ、工夫して切り縮めたり、継ぎ合わせたりして再利用しています。

上間（西湖之間）

正面に賓客を迎えるための上段を設け、右脇に書院を備えたこの部屋は、全体にわたり中国浙江省（せつこう）の西湖の風景が水墨画で描かれています。



西湖図



剥落（はく）止め

本堂障壁画は長い年月の経過によって、傷みが激しくなったため、平成8年度から6年間かけて保存修理事業がおこなわれました。

文化財の修理は、現状を基本とし、傷みの進行を抑える修理方針が取られるため、現状に手を加えることはほとんどおこなわれません。

例えば、補修紙で繕った場合でも、まわりと違和感のない補彩をおこなう程度にとどめており、オリジナルの部分と必ず見分けがつくようにしています。

修復された障壁画

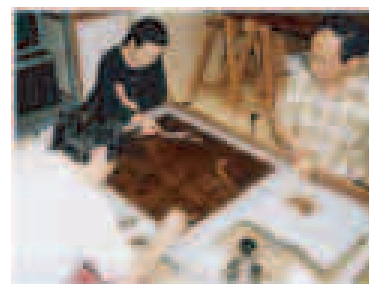


解体（壁貼付のはがし）

文化財の修復は熟練した専門家による手作業で、工程ごとに慎重に検討を重ねながらおこなわれるため、手間と時間がかかります。

また、障壁画は建物と一体となっており、人が出入りする広い空間の中での保存となることから、温湿度や虫害などの日常管理に一層の配慮が必要となります。

このようにたくさんの人々の地道な努力によって貴重な文化財が引き継がれていくのです。



肌裏紙（はだらがみ）の除去

古くから名品として知られていた障壁画には、さまざまな逸話が伝えられています。その中で最も有名なのは戦前の教科書に取り上げられた「画師（ゑい）の苦心」です。

昔ある画師が、堺の某寺に久しく逗留していました。毎日遊び暮らしているのを不審に思った住職が退去を求めると、別れの名残りに一本の檜の絵を描いて東へ旅立ちました。

その後、一ヶ月もたないうちに画師が突然戻ってきました。理由を問うと「描いた絵が何かもの足りないと思い気にかかっていた

が、箱根山中でよい枝ぶりの檜を見て急いで戻ってきた」と言って、その場で一枝を描き添えました。

大安寺に伝わる伝承では、画師が引き返したのは、箱根ではなく桶狭間（はつさ）に近い尾張国鳴海（なご）とされ、一枝を描き添えたのは、檜ではなく「枝添えの松」とよばれる室中の松とされています。

障壁画にまつわる伝説 画師の苦心